8. 地域との協調・コミュニケーション
COMMUNITY

8.1 国民運動と県民運動への参加

（1）「デコ活」および「ぶちエコやまぐち県民運動」への参画と推進

環境省は、2050年カーボンニュートラルおよび2030年度の温室効果ガス削減目標の達成に向け、国民の行動変容とライフスタイルの転換を促す国民運動「デコ活」を展開しています。

また、山口県においても「2050ゼロカーボン・チャレンジ～ぶちエコやまぐち県民運動～」として、地域一体となった温暖化対策が推進されています。

本学では、これら国・県の趣旨に賛同し、地域の一事業者としての責務を果たすべく、独自の環境目標と連動した活動を積極的に展開しています。具体的には、以下の取り組みを重点的に推進し、学内における環境意識の定着と行動変容を図っています。

省エネ・脱炭素の推進：クールビズ、ウォームビズ、エコドライブの励行。

低炭素移動の促進：ノーマイカー運動への参加推奨。

循環型社会への貢献：3R活動（マイバッグの持参、ゴミの持ち帰り）、環境美化活動。

今後も、教育・研究機関としての役割を活かしつつ、持続可能な社会の実現に向けた取り組みを加速させてまいります。

「デコ活」URL　https://ondankataisaku.env.go.jp/decokatsu/

「ぶちエコやまぐち県民運動」URL　https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/site/buchieco/

（2）ノーマイカー運動

ノーマイカー運動は、学内全教職員を対象として、CO_2削減による地球温暖化防止に貢献するとともに、環境保全意識の向上を図るものとして、2009年度から活動を開始し、今回で17年目の活動となります。

報告期間中は、山口県CO_2削減県民運動に準じて環境月間の6月と地球温暖化防止月間の12月（平日）、10月（第3金曜日）に実施しました（図8-1）。



図8-1　ノーマイカー運動

（3）公用車から始まるエコドライブの推進

環境省では、移動に伴う温室効果ガス排出量が生活全体の約４分の１を占めると言われています。

本学では、公用車を計34台保有しており、各自動車へ「エコドライブ10のすすめ」の掲示を実施するとともに、買替時には低公害車への更新を推進しています（図8-2）。



図8-2　エコドライブ10のすすめ

8.2　環境美化活動

（1）キャンパスクリーン作戦

本学では、広大なキャンパスの環境美化のため、学生・教職員が共にキャンパスの一斉清掃を行う「キャンパスクリーン作戦」を毎年実施しています。

また、地域の清掃活動に合わせて、大学の正門前を流れる九田川や、川沿いの道の清掃活動へ参加しています。（図8-3）。

なお、主なキャンパスでは次のとおり開催しました。

吉田キャンパス（2025年6月23～27日、10月20～24日）
小串キャンパス（2025年7月2～4日.8日、11月4-6日）
常盤キャンパス（2025年5月16日、2025年10月30日）



図8-3　吉田キャンパス沿いの
九田川清掃活動



図8-4　たくさんの大賀蓮の開花

（2）植栽の維持管理活動

人事課業務支援室と施設整備課環境整備班は密に連携し、吉田キャンパスの清掃、花壇管理、剪定や病害虫駆除など、日常的な環境美化に取り組んでいます。障害者雇用を含む多様なメンバーによる丁寧な手仕事と、専門的な維持管理を両輪として、安全で美しい景観を守っています（図8-4）。

こうした実績を基盤に、報告期間中は、緑豊かな教育環境を次世代へ引き継ぐ「四季の彩り探究基金」の設置準備を推進しました（図8-5）。本基金を通じて環境教育や地域交流のさらなる深化を目指します。詳細は以下URLよりご確認ください。

https://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~fms-01/kankyo/kankyo_index.html



図8-5　四季の彩り探究基金

（3）環境美化活動　　附属山口小学校

本校は、地域連携・地域貢献の一環として、毎年、夏に学校前を流れる五十鈴川の清掃を行っています。

2025年度は、８月２４日（日）に行いました。教職員と保護者の有志が、朝早くから草刈り機や鎌を持って、はしごで水辺まで降り、川沿いに生い茂っている草を刈っていきました（図8-6）。

暑い中、たくさんの方が参加してくださいました。昨年度からは高学年児童の有志も参加し、草集めや草の運搬を手伝っています（図8-7）。途中から附属山口中学校の生徒も加わり、水辺で刈った草を道路の方まで引き上げました。約２時間の作業で、五十鈴川と学校周辺がとてもきれいになりました。

これからも地域のためにできることを続けていきたいと思います。



図8-6　五十鈴川の草苅作業の様子



図8-7　教職員･保護者･児童等に
よる清掃作業の様子

（4）『共育の丘』～奉仕の森 活動～

「地元との共生」で大学の里山の環境緑化を推進する「『共育の丘』～奉仕の森 活動～」が、2025年12月13日（土）に開催されました。

14回目となった今年は、「山口中央ライオンズクラブ」と「おごおりウィークエンドアドベンチャー」（愛称：あどべん）の子どもたちやスタッフ、そして「山口中央ライオンズクラブ山口大学支部」の学生が活動に加わり総勢約90名が参加して、清掃活動と桜の植樹が行われました。（図8-8）。



図8-8　桜の植樹作業

8.3　地域連携に関する取組（社会連携講座）

山口大学では、外部機関との連携を強化し、教育・研究・地域貢献活動及び地域の活性化を促進するため、外部機関より資金等を受け入れて組織（講座）を設置する「社会連携講座制度」を2018年度より設けています。

地域未来創生センターに2020年度より設置している「美祢・萩ジオパーク推進講座」では、美祢市・萩市と協働で、持続可能な社会を実現するとともに、地域の活性化及び人材育成等の地方創生に資することを目的に、Mine秋吉台ジオパーク（2015年日本ジオパーク認定）地域及び萩ジオパーク（2018年同認定）地域のジオパーク活動を推進しています。



図8-9　公開講座
「歩いて楽しむ山口県のジオパーク－萩編－」で萩六島を望む受講生

同講座では、Mine秋吉台ジオパークの世界ジオパーク認定支援を継続して行っており、2025年度には、ユネスコ世世界ジオパーク執行委員会の現地審査支援等を脇田教授（特命）が行い、同ジオパークの国内11か所目となる世界ジオパーク認定（2026年４月23日）に大きく寄与しました。

その他、Mine秋吉台ジオパークジオガイド指導（2025年6月23日及び24日開催）、山口大学公開講座「歩いて楽しむ山口県のジオパーク－萩編－」（同年11月22日開催）の企画立案（図8-9）、Mine秋吉台ジオパークと連携協定を締結しているベトナムドンヴァンカルスト台地ユネスコ世界ジオパークに関連したイベント「ベトナム味覚体験」（2026年3月15日開催）運営支援、山口大学秋吉台アカデミックセンター活動報告会（同年3月28日開催）実施（図8-10）、萩ジオパーク推進協議会顧問としての同ジオパークの活動支援、日本ジオパークネットワーク全国大会への参加等を同講座の脇田教授（特命）が行い、両地域のジオパーク活動を推進しました。



図8-10　山口大学秋吉台アカデミックセンター活動報告会で開会挨拶をする脇田教授（特命）

地域未来創生センターでは、2026年度も引き続き両ジオパークの活動を推進し、地方創生に寄与してまいります。

地域未来創生センターHP　https://www.yamaguchi-u.ac.jp/ext/

8.4　学生自主活動による取組

（1）「面白い」の連鎖が次世代の産業を創る。

SDG
9（イノベーション）

工学部　機械工学科　小田　貴将

私たち山口大学ロボット研究部は、モノづくりを楽しみ、その魅力を伝えるべく活動しています。ロボコンへの出場や部室での製作を通じ、理論が「動くカタチ」になる面白さを追求する日々です。

この「手を動かし試行錯誤するプロセス」こそが、産業と技術革新を支える確かな基盤になると確信しています。大会に向けた金属加工や3Dプリンタでの試作、そして高度な制御系の構築。こうした実装の積み重ねが実を結び、2025年度九州夏ロボコンではデザイン賞を受賞することができました（図8-11）。既存の枠組みを超えて新たな価値を生み出そうとする熱量こそが、僕たちのイノベーションの原動力です。

また、地域のお祭りで子供たちがロボットに触れる機会も大切にしています（図8-12）。操作に目を輝かせる姿を見る時、私たちの活動が未来のエンジニアを育む「社会的な基盤づくり」に直結していると実感します。

工学のワクワクを山口から発信し、次世代を担う創造的な風土を育みたい。日々の「面白い」という純粋な感覚の先に、持続可能な未来があると信じています。



図8-11　九州夏ロボコンにて



図8-12　宇部まつりの操縦体験ブースの準備中

（2）里山スマートチャレンジ　ひこぼしプロジェクト

SDG
2（飢餓）
4（教育）
11（都市）

経済学部　経営学科　安岡直輝

私たちひこぼしプロジェクトは「姫山から紡ぐ、食と農の恵み」というスローガンのもと大学周辺で借りている畑をフィールドに、農業を通じた食農教育やスマート農業の試行、耕作放棄地の有効活用に取り組んでいます。

2024年度の活動ではプランターでの小松菜の栽培と水やりの自動化に挑戦しました。また、長門市で子どもたちにスマート農業に触れる機会を提供する「未来の農業体験会in長門」を主催しました。

その経験を活かし、2025年度は、実際の畑をフィールド（図8-13）にトマトづくりや玉ねぎづくりに挑戦しています。監視カメラの設置による生育状況のモニタニングや、子どもたちと共同で農業に関するフィールドワーク（図8-14）に取り組みました。

今後は畑を借りている平川地域にさらに溶け込んで活動できるように、周辺住民も巻き込んだ企画や畑の運営計画を練っていきたいと考えています。私たちの活動が広がり、少しでも多くの方々が食と農の可能性に気付いていただくきっかけにしたいと考えています。



図8-13　トラクターによる作業風景



図8-14　子どもたちとのフィールドワーク